



LIBRARY

いわき総合高校図書委員会 平成30年10月号

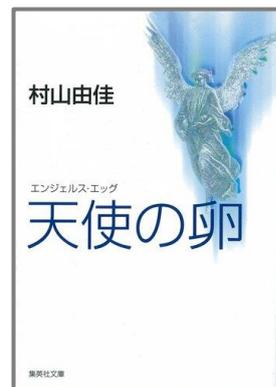
今月のオススメ📖



《天使の卵～エンジェルス・エッグ》 著者：村上 由佳

『天使の卵～エンジェルス・エッグ～』は、18歳の美術予備校生の主人公が春の満員電車で出会った女性に心惹かれ、そして運命が悪戯に交差し二人を翻弄していく……。

運命的な出会いと偶然の再会や、主人公を取り巻く環境などを通して心情表現や緻密な思考が良いところだと思います。続編が3冊あるので、そちらもぜひ読んでみてください。(TS)



余談

今回“恋愛小説の名手”である村上由佳さんの作品を紹介してくれたのは、以外にも図書委員の男子です。村上さんの読者は、女子がほとんど？と思っていました。繊細で複雑な女心を知るために、男子にもぜひ村上さんの作品を読んで欲しいものです。

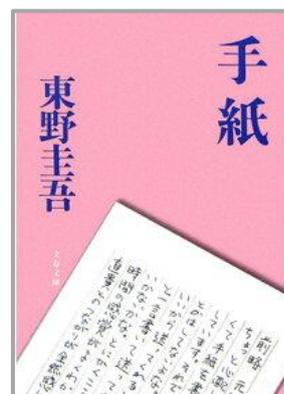
話題の本😊

《手紙》 著者：東野 圭吾 発行部数 240万部突破 この冬亀梨和也主演でTVドラマ化

両親を早くに亡くした剛志と直貴の兄弟は、この世でたった二人きり肩を寄せ合い生きてきた。身体を壊し働くことができなくなった兄が、弟の大学進学のため、思いがけず強盗殺人を犯してしまう。

服役中の兄から弟へ、月に一度手紙が届く。強盗殺人犯の弟という運命を背負った直貴が、周囲の差別や偏見に苦しみながらも、やがて自分の家族を持つまでになるのだが……。

東野圭吾さんの『手紙』は、東野さんの作品の中でも、名作中の名作といわれています。何度も舞台化、映画化もされた作品です。東野さんの100冊近くある作品の中で、ファンが選ぶランキングベスト10に必ず入ります。映画やドラマは微妙に設定が変わってしまうので、ぜひ原作を読んでから観て欲しいと思います。終盤は号泣必死です。ハンカチをお忘れなく。

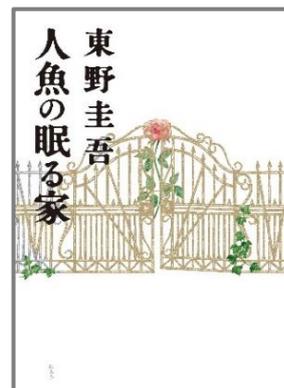


《人魚の眠る家》 著者：東野 圭吾 映画 11月16日全国公開

娘の小学校受験を間近に控えたある日、“娘がプールで溺れた”という報告が届く。播磨夫妻に告げられた医師の言葉は、「おそらく脳死」という残酷なものだった。一旦は現実を受け入れた二人だったが……。

「脳死と臓器移植」の問題を正面から捉えた社会派ミステリです。

ミステリ作家としてお馴染みの東野さんですが、社会問題をさりげなく取り上げた作品が少なくありません。動機や巧みなトリックを見破る楽しみだけでなく、著書自身がエッセイ等で「人間を描く」と語っている通り、しっかり人間が描かれています。シリーズものもいくつかありますが、オススメは加賀恭一郎シリーズです。ぜひ、ご一読ください。



先生のオススメ

國田 顕應 先生

◀ わが指のオーケストラ ▶ 著者：山本 おさむ

この作品は、聴覚に障害のある子どもたちの教育に情熱を傾けた、高橋潔という実在の人物について描かれたものです。

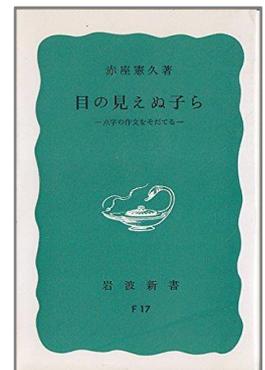
皆さんは、手話を知っていますか？ 3年生で手話の授業をとっている皆さんはもちろんですが、テレビの手話ニュースや大きなイベントでは手話通訳が一般的に行われているので、見たことがあると思います。

しかし、大正～昭和初期からごく最近に至るまで、教育の場では手話が否定的に扱われていました。それは、口話法(こうわほう)という新しい教育の方法が導入されたからでした。口話法とは、音声言語にもとづいて言語を教える方法です。聴覚に障害のある人は、ただでさえ音を聞き取ることにも困難があるのに、音声を聞いたり相手の唇の動きを読み取ったり、発語をしたりする口話法の教育のあり方は大変厳しいものであったといわれています。全国的に聴覚に障害がある人の教育が口話法を中心になされていた時代に、口話が適している者には口話法で、手話が適している者には手話で、それぞれの実態に応じた教育が必要であることを訴え続けたのが高橋潔という人物でした。

現在は手話がいろいろな場面で使われるようになってきました。聴覚に障害のある人たちが教育現場での手話導入を訴えて、2009年に初めて教育の場での手話が認められました。こうした歴史的な事情が描かれている作品です。

内容の一部を紹介します。主人公の高橋潔は、音楽の道を志していましたが、転進し聴覚障害の教育の道に就きます。そこで初めて出会ったのが、戸田一作という子どもでした。言葉という世界を知らなかった一作は、意思を伝えられず、自分自身のことをわかってもらえずに苦悶の生活を送っていました。しかし、高橋潔との教育的な関わりの中で、一作は手話を通して言葉の世界に出会って、教師の道を歩み出すことになりました。一作の言葉との出会いは、視覚聴覚両方に障害のあったヘレンケラーが、サリバン先生のもとで、「WATER!」と言葉の世界と出会った再現のような場面で表現されています。

作者の山本おさむは、『遙かなる甲子園』で聾学校(現在の視覚特別支援学校)の野球部の子どもたちを描き、『どんぐりの家』で聴覚障害と知的障害の重複障害の子どもを描いて、社会的に大きな反響を呼びました。福祉、障害児教育、社会問題に関心のある生徒の皆さんにぜひ読んでもらいたい作品です。



◆図書だより編集部より◆

國田先生には、聴覚障害者に関する名著を紹介していただきましたが、視覚障害児の教育に尽力した赤座憲久さんの著書もぜひ読んで欲しい1冊です。

赤座憲久さんの『目の見えぬ子ら』は、盲学校での教員生活をもとに書いた実践の記録です。

読書週間

10月27日(土)～11月9日(金)

学校図書館にも、新着図書がたくさん入りました。秋の夜長、ちょっとの時間スマホやTVのスイッチを切って、本に親しんでみませんか？

ホッと一息 本と一息♪

